

グローバルデザイン提案書:紋別市

西館 崇* 福嶋 浩彦**

概要

本稿は、北海道紋別市のグローバル・プロファイリングを「基本情報」「経済・ビジネス」「研究・開発」「文化・交流」「生活・居住」「交通・アクセス」の6項目から整理した上で、同市のグローバル・デザインについて考察したものである。紋別市はオホーツク沿岸のおよそ中央に位置し、南北41km、東西34km、総面積は830.70km²の市域を有する。海と山、川に囲まれた雄大で美しい自然環境と景観を持つ同市には、2024年6月現在、20,059人が暮らしている。紋別市の主要産業は水産加工業であり、その出荷額は365億円規模となっている。この水産加工業を含む地域経済の一端を支えるのが技能実習生などの外国人材である。2024年6月現在、紋別には811人の在留外国人が暮らしているが(紋別市人口の4.00%にあたる)、

その内訳は、技能実習生が503人で半数以上を占めており、次いで特定技能212人となっている。

紋別市のグローバル・デザインを描く上での重要なポイントの一つは、紋別市在住の外国人たちとの共生をいかに実現するかである。共生とは一般に、国籍や民族等の異なる背景をもつ人々が共に安心して暮らしながら、対等な関係のもとで地域社会を一緒につくることを目指すものである。本稿では、紋別市による外国人らを対象とした二つの交流事業と同市内中心部に位置する紋別プリンスホテルの試みをグローバル・デザインの先進事例と捉え、考察している。その上で紋別市における更なる共生社会の実現へ向けたヒントと課題を検討している。

I. グローバル・プロファイリング

1. 基本情報

紋別市は、オホーツク海沿岸の中央に位置し、南北41km、東西34km、総面積は830.70km²の市域を有する(図1参照)。海岸線から内陸へ傾斜が増す地勢で、西部は南北に連なる北見山地に、南部は東西に起伏する千島山系に囲ま

れており、天塩(てしお)岳にその源を発する渚滑(しょこつ)川がオホーツク海に注いでいる。市域の約8割は森林地帯であり、海岸線は28kmである。紋別市は、海、山、川に囲まれた雄大で美しい自然環境・景観を有する。気候は、道内の内陸に比べ穏やかで、2月の平均気温は

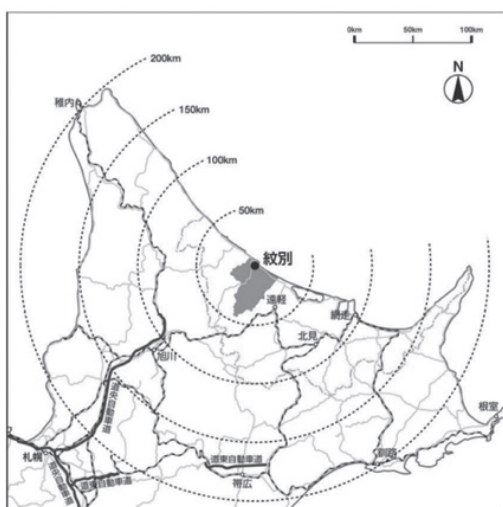
* 共愛学園前橋国際大学准教授

** 中央学院大学社会システム研究所教授

マイナス5℃、8月の平均気温は19℃である。降雪期間は130日前後となっているほか、流水初日は1月下旬、流水終日は4月上旬、流水期間は70日前後となっている¹⁾。

道内では、札幌市から乗用車で4時間(270km)、旭川市から2時間30分(140km)に位置している。またオホーツク紋別空港があることから、羽田空港からは2時間の距離にある。本市の市街地は、市の中心部である紋別市街地、渚滑川河口に位置する渚滑市街地、渚滑川中流に位置する上渚滑市街地がある。紋別市街地は、網走地方西部の交通、物流、商業・サービス、広域行政の拠点になっている²⁾。

図1 紋別市の位置



出典：紋別市(2020)『第2期 紋別市総合戦略(令和2年10月改訂版)』3頁。

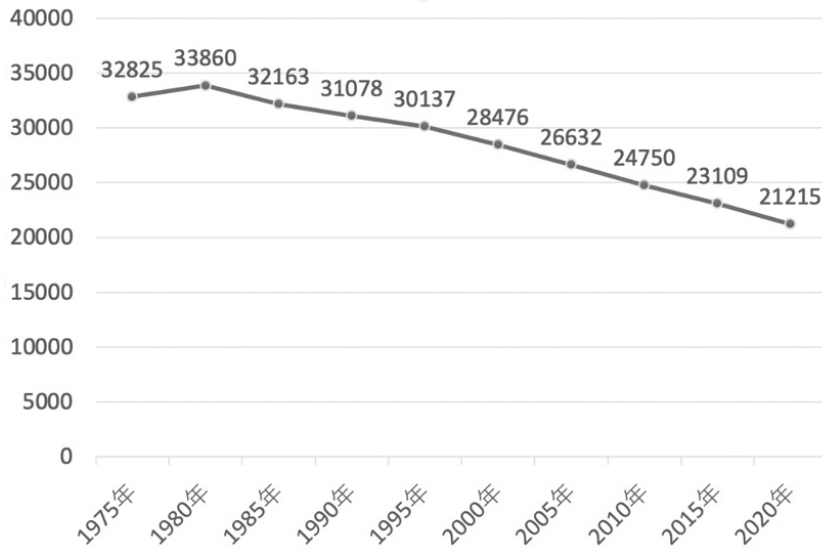
なお、紋別市はオホーツク海沿岸の数少ない天然の良港であり、貞享年間(1684～1687年)に松前藩がその直轄であった宗谷場所(そうやばしょ)から斜里場所(しやりばしょ)へ至るオホーツク海沿岸の寄港地として利用したのが始まりと言われている。それ以来、同市は農林水産業や水産加工業などの第1次、第2次産業を基盤に発展してきたが、東洋一と呼ばれた鴻之舞(こうのまい)金山の閉山(1973年)、北洋漁業基地としての基盤を揺るがせた二百海里漁業規制、国鉄渚滑線・JR名寄(なよろ)本線の廃止、道都大学の移転などの社会的要因があり、1962(昭和37年)年の42,525人をピークに人口は減少し続けている³⁾。とりわけ昭和40年代の人口減は、鉱山の出鉱量低下にともなう企業の減産体制への移行によるところが大きいと考えられている⁴⁾。図2は、1975年から2020年までの人口推移を表したものである。1980年に少しの人口増加が確認できるが、それ以降は減少している。2020年では21,215人であったが、2023年10月末現在は20,382人である⁵⁾。

図3は、国立社会保障・人口問題研究所(社人研)、創生会議、紋別市による総人口推移の比較を表したものである。紋別市の推計では2040年に14,871人、2060年に8,140人となるが、社人研ではそれぞれ13,998人、8,140

- 1) 紋別市(2020:3)を参照。
- 2) 同上。
- 3) 紋別市(2015:1)を参照。
- 4) 紋別市(2015:4)を参照。
- 5) 紋別市役所HP「紋別市の人口」

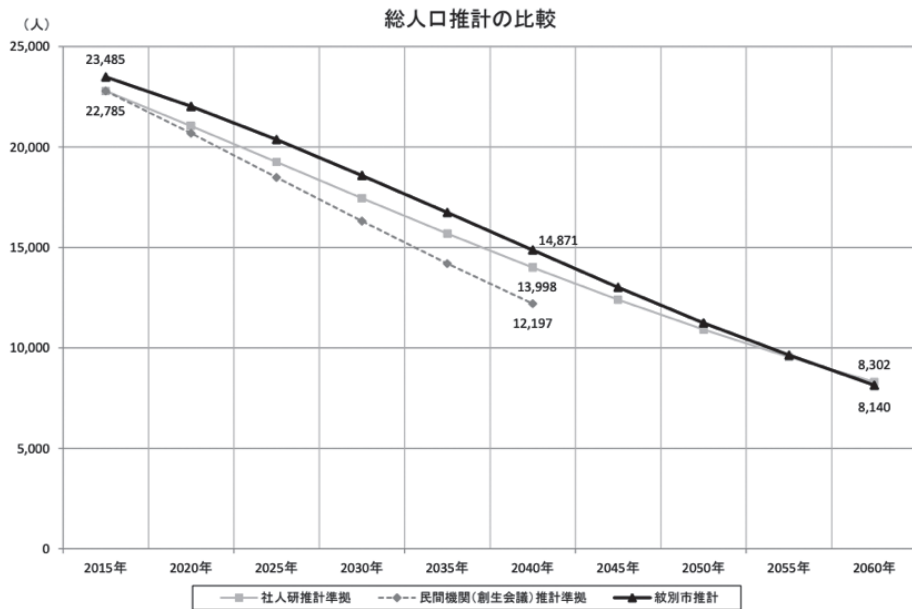
(<https://mombetsu.jp/administration/?content=500>) (最終アクセス2023年12月23日)を参照。

図 2 紋別市の人口推移（1975 年～ 2020 年）



出典：紋別市（2021）『令和3年版 紋別市統計書』12頁から筆者作成。

図 3 2060 年までの人口推計



出典：紋別市（2015）『紋別市人口ビジョン』25頁。

人と推計している（なお創生会議の 2040 年の推計は紋別市、社人研よりも低く 12,197 人となっている）。2023 年 10 月現在の総人口数

（20,382 人）を踏まえれば、紋別市の人口推移は社人研の推計に近い形で推移していると思われる。

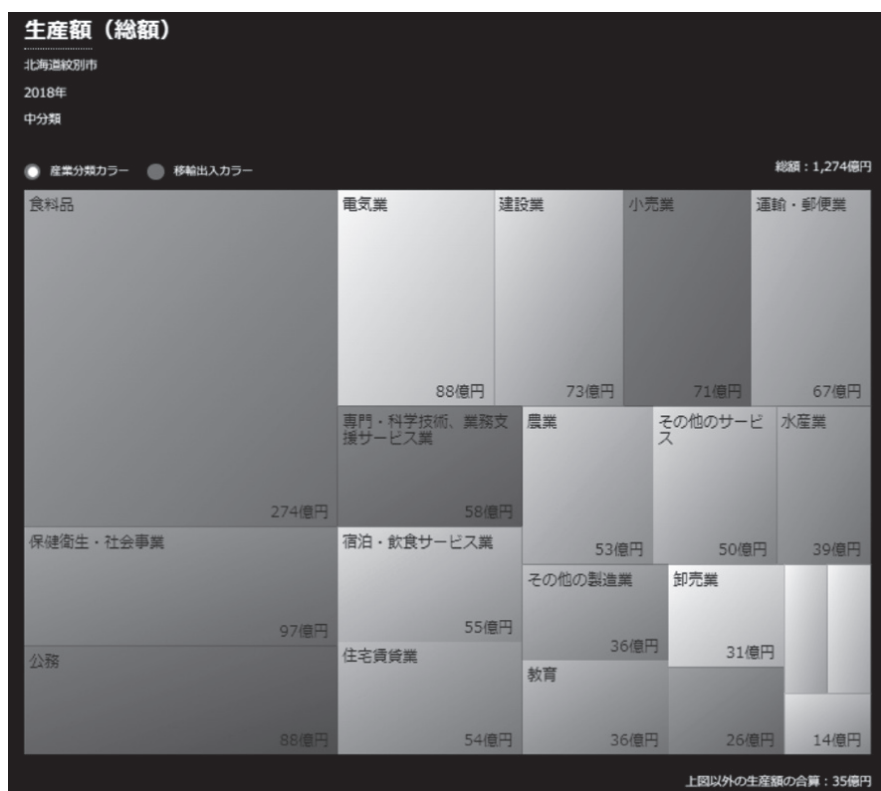
2. 経済・ビジネス

(1) 地域経済の概況

RESAS 生産分析によれば、紋別市の 2018 年の生産額（総額）は 1,274 億円で、その内訳は第 1 次産業 95 億円（7.5%）、第 2 次産業 417 億円（32.7%）、第 3 次産業 762 億円

（59.8%）となっている。第 1 次産業では農業 53 億円、水産業 39 億円など、第 2 次産業では、食料品 274 億円、建設業 73 億円など、第 3 次産業では電気業 88 億円、小売業 71 億円などの比重が大きい（図 4 参照）。

図 4 紋別市の 2018 年の生産額内訳



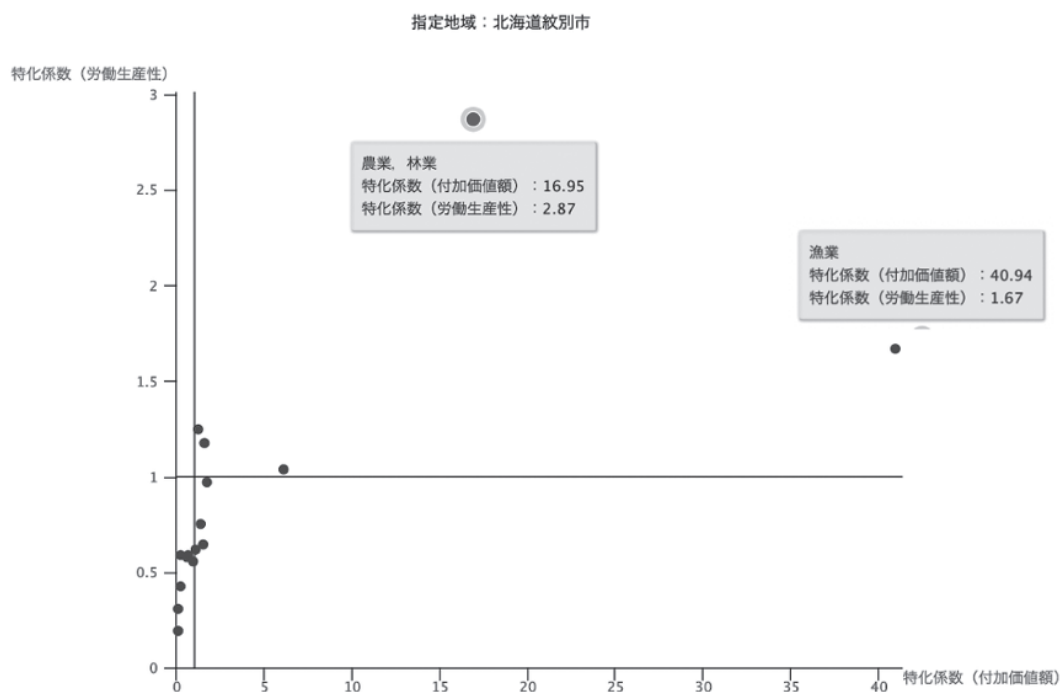
出典：RESAS 地域経済循環マップ「生産分析 産業分類」（北海道紋別市, 2018）を参照

(2) 産業別特化係数から見た紋別市

RESAS 産業構造マップにおける「稼ぐ力分析」から紋別市の産業別特化係数を見てみると、一次産業における農業・林業、漁業に大きな特

徴があることがわかる（図 5 参照）。農業・林業の付加価値額、労働生産性から見た特化係数はそれぞれ 16.95、2.87 である。漁業の場合はそれぞれ 40.94、1.67 である。

図5 付加価値額と労働生産性から捉えた紋別市の産業



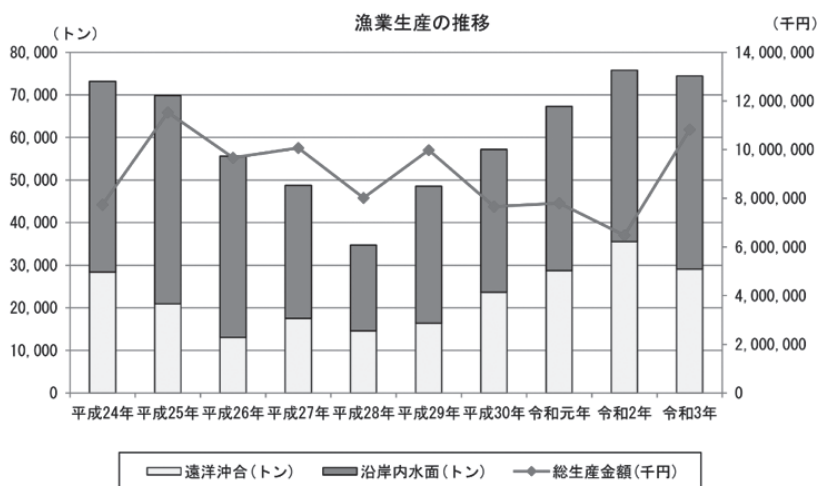
出典：RESAS産業構造マップ「稼ぐ力分析」（紋別市2016年）を参照。

(3) 農業

紋別市の耕地面積は8,440haで、農業就業人口は225人⁶⁾、農業経営体数は92経営体(うち農家数は79戸)である⁷⁾。2020年の品

目別農業産出額総額は80億円規模であり、その内訳は生乳51.2億円、生乳以外の乳用牛14.5億円、肉用牛12.1億円などとなっている

図6 紋別市の漁業生産の推移



出典：紋別市（2022）『もんべつの水産』1頁。

(4) 林業

紋別市の林野面積は64,806haであり、林業経営体数は37である⁸⁾。

移(図6)をみると、2016(平成28)年には漁獲量が35,000トンほどに、また2014(平成26)年、2015(平成27)年、2017(平成29)年、2018(平成30)年には50,000トン前後となるが、それ以外の年では約70,000トンの漁獲量がある。2021(令和3)年の総生産額は100億円を超える¹¹⁾。

(5) 漁業

紋別市の2018年の漁業就業者数は336人であり⁹⁾、漁業経営体数は73、漁船隻数は133隻である¹⁰⁾。近年における漁業生産の推

紋別は水産加工業も盛んである。同市の水産

6) 60日以上、農業に従事した世帯員、役員・構成員(経営主を含む)数。農林水産省「わがマチ・わがムラ市町村の姿 グラフと統計で見る農林水産業 基本データ 北海道紋別市」を参照。

7) 同上。

8) 同上。

9) 組合員ベースで漁業者数をみると、2018年の漁業者数は157人である(紋別市2022:7)。

10) 農林水産省「わがマチ・わがムラ市町村の姿 グラフと統計で見る農林水産業 基本データ 北海道紋別市」を参照。

11) 漁獲量と漁獲高を大きく牽引するのは「ホタテ成貝」である。紋別市(2022:4)を参照。

加工品の出荷総額は 2020（令和 2）年で 300 億円規模、2021（令和 3）年で 365 億円規模となっている。その中でも「生鮮冷凍水産物」の出荷額は突出しており、2020（令和 2）年で 165 億、2021（令和 3）年で 218 億となっている¹²⁾。本節（1）で確認したように、紋別市における生産額の第一位は食料品(274 億円)であったが、ここには水産加工品が大きく貢献していると言える。

（6）ふるさと納税

近年、紋別市のふるさと納税が大きな注目を集めている。2021 年度のふるさと納税受入額は 152 億円で全国 1 位である。2022 年度では宮崎県都城市（196 億円）に首位を譲るも、194 億円で 2 位となった。

紋別市では 2008 年 9 月に「オホーツクの流水と自然を守る寄附条例」を策定した。条例の目的は「オホーツクの流水と自然に象徴される紋別市に寄せられる寄附金を財源に、各種事業を実施することで、多様な人々の紋別市への思いを具現化し、もって活力あるまちづくりに資すること」（第 1 条）である。同条例によると、寄附者は寄附を行う際、次の 8 つの事業—それらは①アザラシの保護活動などオホーツクの海洋環境に関する事業、②森林、湖沼、河川等の環境保全啓発活動に関する事業、③市内経済の活性化に関する事業、④次世代を担う人

材育成に関する事業、⑤医療、福祉又は子育て支援の充実にに関する事業、⑥人口減少対策に関する事情、⑦公共施設の整備に関する事業、⑧市長が必要と認める事業—からいずれかを指定し、寄附を行う（第 2 条、第 3 条）¹³⁾。そして寄附金は「オホーツクの流水と自然を守る基金」に積み立てられ、寄附者の意向が反映されるように運用される（第 4 条、第 5 条）。

近年における寄附額は年々増加している。2016 年の総寄附額は 2 億 5 千万円規模であったが、翌年には 10 億円を超えた。2018 年度では約 21 億円、2019 年度では約 77 億円となる。20 年度には 100 億円台を超え、2021 年度は 150 億円、2022 年度は 190 億円を超えた¹⁴⁾。

（7）小売・卸売業

紋別市の 2016 年の小売・卸売業については、事業所が 260 ヶ所（小売業 199、卸売業 61）であり、年間商品販売額は 913.4 億円であった¹⁵⁾。

（8）企業数・事業所数・従業者数・

付加価値額と賃金水準

紋別市の 2016 年の企業数は 947 社であり、事業所数は 1,254 ヶ所、従業者数は 9,289 人である。その付加価値額は 260 億円であり、そこから算定される一人当たりの付加価値額

13) 初年度となる 2008 年度から 2015 年度までは、寄附金の使い道は、①アザラシの保護活動などオホーツクの海洋環境に関する事業、②地球環境の変化などの対応する環境保全啓発活動に関する事業、③森林の適正な育成管理に関する事業、④湖沼、河川の適正な管理に関する事業、⑤その他、市長が必要と認める事業、の 5 事業であった。

14) 紋別市のふるさと納税についてのさらなる詳細は、西舘・福嶋（2024：8-12）を参照されたい。

15) RESAS 産業構造マップ「小売・卸売業 事業所数／年間商品販売額」（北海道紋別市）を参照。

374.4 万円となっている。この額は全国平均の 544.9 万円より 3 割ほど低く、北海道平均の 417.6 万円よりも 1 割ほど低い¹⁶⁾。

(9) 高等教育修了者の割合 (2020年)

紋別市の高等教育終了者の割合は 20.1% である¹⁷⁾。

(10) 女性・高齢者の就業率 (2020年)

紋別市の女性就業率は 46.6% (女性就業者 4,516 人、総就業者 9,688 人) である。高齢者の就業率は 24.6% (65 歳以上の就業者 1,891 人、65 歳以上の総人口 7,697 人) である¹⁸⁾。女性就業者の割合は全国平均 (45.4%) よりも少し高く、高齢者については全国平均 (24.7%) とほぼ同じくらいである。

(11) 在留外国人データ

紋別市の在留外国人数は 2024 年 6 月現在

で 811 人 (676 人) である (括弧内は前年のデータである)¹⁹⁾。紋別市の総人口 20,059 人 (20,496 人) に占める割合は 4.00% (3.30%) で、これは全国平均の 2.89% (2.59%) を上回っている²⁰⁾。在留資格別の内訳は、技術・人文知識・国際業務 18 人 (17 人)、技能 4 人 (5 人)、特定技能 1 号 212 人 (182 人)、技能実習 1 号 190 人 (178 人)、技能実習 2 号 283 人 (164 人)、技能実習 3 号 30 人 (58 人)、家族滞在 6 人 (6 人)、特定活動²¹⁾ 12 人 (12 人)、永住者 21 人 (22 人)、日本人の配偶者等 11 人 (12 人)、特別永住者 6 人 (6 人) などである²²⁾。

(12) 財政状況に関するデータ

紋別市の財政力指数は 0.32 で、全国平均紋別市の財政力指数は 0.32 で、全国平均 0.51 より低く、また実質公債費比率は 175.44 (全国平均を 100 とする) である²³⁾。一人当たり地方税は 14.2 万円²⁴⁾、人口一人当たり職員

16) RESAS 産業構造マップ「全産業」(北海道紋別市)を参照。

17) 総務省統計局「令和 2 年国勢調査結果」の「就業状態等基本集計 第 11-2 表 男女、年齢 (5 歳階級)、在学か否かの別・最終卒業学校の種類別人口 (15 歳以上)」紋別市に掲載されている高等教育修了者 3,727 人 (「卒業生 短大・高専」「卒業生 大学」「卒業生 大学院」の合計)を総務省統計局「令和 2 年国勢調査結果」紋別市の 20 歳以上人口 18,534 人で除した値。

18) 総務省統計局「令和 2 年国勢調査結果」の「就業状態等基本集計 第 1-2 表 男女、年齢 (5 歳階級)、労働力状態別人口及び労働力率 (15 歳以上)」紋別市を参照。

19) 法務省「在留外国人統計 表 24-06-12 市区町村別 在留資格別 在留外国人」紋別市を参照。

20) 日本全国における 2024 年 6 月の在留外国人総人口は 3,588,956 人 (3,223,858 人)、日本の総人口は 1 億 2397 万 5 千人 (1 億 2451 万 7 千人) である。

21) 在留資格「特定活動」は「法務大臣が個々の外国人について特に指定する活動」を指す。出入国管理及び難民認定法別表第一の五の表の下欄イ～ニに記載された法定特定活動 (特定研究等活動、特定情報処理活動、特定研究等家族滞在活動、特定情報処理家族滞在活動) の他、法務大臣の告示により指定された告示特定活動 (2020 年 3 月時点で 49 種類) がある。参照、法務省出入国在留管理庁「出入国管理法令等」。

22) 法務省「在留外国人統計」前掲注を参照。また 2024 年 9 月 18 日の市国際交流推進室担当者へのヒアリング時に頂いた資料などを合わせて参照。

23) RESAS 地方財政マップ「自治体財政状況の比較」(北海道紋別市)を参照。

24) RESAS 地方財政マップ「一人当たり地方税」(北海道紋別市)を参照。

数は11.63人である²⁵⁾。

3. 研究・開発

(1) 留学生受け入れ数

紋別ロータリークラブがアメリカのロータリークラブとの間でロータリー青少年交換事業を行っており、紋別とアメリカから毎年それぞれ1名ずつの高校生が交換留学（期間は約1年）を行っている。直近ではコロナ禍のために3年間中止となっていたが、2023年度より再開した。また、2022年度よりタイの高校生2名を紋別高校に半年間、受け入れる事業を行っている²⁶⁾。紋別市の更なる国際交流事業等については、本稿d. 文化・交流の(17)～(19)を参照されたい。

紋別市には現在、高等教育機関がないことから、高等教育機関への受け入れについては該当なしの状況である。同市にはかつて道都大学（1978年開学、社会福祉学部社会福祉学科、美術学部デザイン学科・建築学科）があったが、1996年に美術学部が札幌キャンパスに移設、2005年には社会福祉学部が札幌キャンパスへと移設された。

(2) SDGs、地方創生・地域開発に取り組む大学

該当なし。

(3) グローバルニッチトップ企業

(2014年、2020年)

該当なし。

(4) はばたく中小企業・小規模事業者300社

(2018～2021年)

2018年、2019年、2021年については該当なし。2020年については以下の2社が選定されている²⁷⁾。

- ・佐藤木材工業（株）「積極的な機械導入で林業現場を意識改革／中心的な存在として地域林業を活性化」（生産性向上部門）
- ・マルカイチ水産（株）「オホーツク海の新鮮な魚介を、こだわりの製法と品質管理を徹底した工場で生産」（需要獲得部門）

(5) 特許数

特許数は1件である。セクションは「運輸」、主題事項は「成形」であり、その説明を確認すると「木材または類似の材料の加工または保存」となっている。特許権者は鈴木建設（株）で、特許出願年月日は2007年10月30日である²⁸⁾。

(6) 創業比率（2014～2016年）

紋別市の創業比率は2.95%である。これは

25) RESAS 地方財政マップ「自治体財政状況の比較」（北海道紋別市）を参照。なお、人口あたり職員数とは、都道府県の場合は人口10万人、市町村（特別区を含む）の場合は人口千人あたりの職員数である。

26) 以上については、2023年11月16日に行なった市担当者へのヒアリング内容による。なお、日本からタイへの派遣については、短期留学派遣という形で2023年1月に実施している。

27) 経済産業省北海道経済産業局 HP「はばたく中小企業・小規模事業者300社を選定しました～北海道内から13事業者が選定～」(2020年11月13日付)

(<https://www.hkd.meti.go.jp/hoksc/20201113/index.htm>)（最終アクセス2023年8月17日）。

28) RESAS 企業活動マップ「研究開発 特許分布図」北海道紋別市を参照。

全国平均の 5.04%、北海道平均の 4.88% に比べて低いと言えよう²⁹⁾。

(7) 表彰 (2017~2021年)

2018 年に 1 件、2019 年に 1 件の計 2 社が表彰されている。それらは以下のとおり。

- ・佐藤木材工業 (株)「地域未来牽引企業」(2018 年)
- ・紋別漁業協同組合「気象庁長官表彰 気象通報 (漁船)」(2019 年)

4. 文化・交流

(1) 観光地の数・評価

大手旅行ウェブサイトのトリップアドバイザーで紋別市の「観光スポット」をクリックすると 37 件がヒットする。口コミ数が多い順に上位 5 位までをあげると、オホーツクとっかりセンター (口コミ数 131)、流水砕氷船ガリンコ号 III (口コミ数 124)、氷海展望塔オホーツクタワー (口コミ数 100)、鴻之舞鉱山跡 (口コミ数 89)、北海道立オホーツク流水化学センター GIZA (口コミ数 89) が挙げられる。

オホーツクとっかりセンター (写真 1) の「とっかり」とはアイヌ語で「アザラシ」のことを意味する。同施設は野生のアザラシを保護し、飼育する日本で唯一の施設である。現在は 20 頭のアザラシが飼育されている。流水砕氷船ガリンコ号 III (写真 2) は、アラスカの油田開発用に試験的に造られた砕氷船を、観光船に改造したものである。2004 年には「流水とガリンコ号」として北海道遺産へ登録された。

氷海展望塔オホーツクタワーは、海岸から約 1 キロ沖、紋別港第 3 防波堤の先端にあるタワーで、世界初の氷海海中展望塔である。鴻之舞 (このまい) 鉱山跡 (写真 3) は、日本有数の金鉱山の跡である。1916 (大正 5) 年に鉱床が発見され、翌年から住友 (後の住友金属鉱山) が経営に乗り出し、1973 (昭和 48) 年の閉山まで、金・銀・銅などを産出した。北海道立オホーツク流水化学センター GIZA は、オホーツク海のそばに立つ、流水をテーマにした科学館である。

(2) 文化財指定件数

2 つの指定文化財がある。1 つは旧上藻別駅通所 (きゅうかみもべつえきていしょ) であり、もう 1 つはオムサロ大地竪穴群である。

旧上藻別駅通 (写真 4) は紋別市中心部から南へ 2.3 km の上藻別にあり、1926 (大正 15) 年に官設の「駅通」として建てられた。戦前の北海道独特の建築形態を有する古建築物で、2008 (平成 20) 年に国の登録有形文化財に指定された。なお、駅通所とは、人馬継立と旅人宿泊など運輸・通信・宿泊を一体とした明治以降の北海道独特の制度による建物で、紋別地方ではこの「旧上藻別駅通」が唯一現存する駅通建造物である³⁰⁾。

オムサロ大地竪穴群は、市内国道近くのオホーツク海に面した海岸段丘地帯に位置し、縄文時代早期から続縄文時代、オホーツク文化時代、擦文 (さつもん) 時代、アイヌ時代と 1 万年もの間の生活の痕跡を残す住居群である。

29) RESAS 企業活動マップ「企業情報 創業比率」北海道紋別市を参照。

30) 紋別観光案内所 HP や「文化遺産オンライン」などを参照。

1964年に北海道指定遺跡に指定された。現在はオムサロ遺跡公園として整備され、擦文時代

の復元住居や当時アイヌの人々が食用としたオウバユリなどを見ることが出来る³¹⁾。

写真1 オホーツクとっかりセンター入口



出典：オホーツクとっかりセンターHPより

写真2 停泊中のガリンコ号



出典：筆者撮影（2023年11月17日）

写真3 鴻之舞鉦山跡



出典：筆者撮影（2024年9月17日）

写真4 旧上藻別駅通所



出典：筆者撮影（2024年9月17日）

(3) 景観まちづくりへの貢献度

北海道は、景観法に基づく景観行政団体として北海道景観計画区域（景観行政団体となっている市町村の区域を除く）を指定している。オホーツク管内では北見市と清里町が景観行政団

体となっており、紋別市は当該団体とはなっていないが、オホーツク総合振興局が取りまとめている紋別市についての参考資料によれば、地域の良好な景観資源として8ヶ所が、主要な展望地として2ヶ所が挙げられている³²⁾。

31) オホーツク総合振興局 HP「景観法に基づく行為の届出等について」

(<https://www.okhotsk.pref.hokkaido.lg.jp/kk/akk/kenshi/matidukuri.html>)（最終アクセス 2023 年 8 月 17 日）を参照。

32) オホーツク総合振興局 HP「景観法に基づく行為の届出等について」

(<https://www.okhotsk.pref.hokkaido.lg.jp/kk/akk/kenshi/matidukuri.html>)（最終アクセス 2023 年 8 月 17 日）を参照。

(4) 美術館数・博物館の数

紋別市には美術館と博物館がそれぞれ1つずつある。それらは「紋別市立博物館 まちなか芸術館」と「紋別市立博物館」である。

(5) イベントの数・評価

紋別市観光協会によると、紋別市には4つの大きな祭りがある。「もんべつ港まつり」(7月開催)、「もんべつグルメまつり」(10月開催)、「海産まつり」(12月開催)、「もんべつ流水まつり」(2月開催)である。2020年、2021年は「もんべつ港まつり」「もんべつグルメまつり」が新型コロナウィルス感染症拡大防止のため中止となった。2019年のそれぞれの来場者は、港まつりが92,000人、グルメまつりが6,406人、海産まつりが4,500人、流水まつりが45,677人となっている³³⁾。

(6) 宿泊施設客室数

じゃらんnet「紋別市」で宿泊施設を調べると6件ヒットした(2024年1月現在)。客室数の合計は446室である。この中には2棟のコテージ(Okhotsk Ocean Villa AL MARE mombetsu)、5棟のゲル(ゲルキャン!もんべつ)が含まれている。

(7) 観光案内所・病院の多言語対応

紋別観光振興公社やオホーツク紋別空港総合案内所は「英語」対応が可とのことである。多言語対応の病院については、日本政府観光局「日本を安心して旅していただくために」や厚生労

働省「外国人患者を受け入れる医療機関の情報を取りまとめたリスト」には記載がなかった。一方「SCUEL(スクエル)」(<https://scuel.me/>)によると、以下4つの病院が多言語対応化となっている(2024年1月現在)。

- ・広域紋別病院(英語、広東語、北京語、ハングル語、台湾語、イタリア語、ドイツ語、スペイン語、フランス語、ロシア語)
- ・医療法人社団 幸栄病院(英語、広東語、北京語、ハングル語、台湾語、フランス語、ロシア語)
- ・医療法人社団耕仁会曾我クリニック(英語)
- ・武田医院(英語)

(8) 休日の人の多さ

紋別市の観光についてのデータとして、まずは休日の滞在人口率を見てみよう。2021年の休日午後2時の各月の滞在人口の平均を2020年の国勢調査人口(15歳以上80歳未満)で除した数値は1.03となっている³⁴⁾。休日に総人口の3%程度の人が紋別市を訪れたことを示している。

観光客については紋別市の統計資料からも確認しておきたい。表1、表2は同市がまとめた観光客入込状況と観光施設利用状況である。表1からは、同市には2019(令和元)年まで50万人前後の観光客があったことがわかるが、2020(令和2)年には新型コロナウィルスの感染拡大のためか20万人規模に落ち込んでいることが示唆される。道内外別で見ると、道内

33) 紋別市(2021)『令和3年紋別市統計書』115頁を参照。

34) RESAS まちづくりマップ「滞在人口率」紋別市を参照。

と道外の比率はおおよそ 1.5：1 で推移している。宿泊者数では、その半数から 3 分の 1 が観光客であることがわかる。日帰観光客は 2020 年までは 40 万人を超えている。表 2 は市内の観光施設の利用状況である。コムケ国際キャンプ

場の令和 2 年度の利用数は 1,429 となっており、前年に比べ微増している。オムサロ原生花園については表を見る限り、平成 30 年度以降から減少傾向にある。大山山頂園の利用数は近年では一万人規模であったが、令和 2 年度は

表 1 観光客入込状況

年度	道内外別			宿泊者数		日帰観光客
	総数	道内客	道外客	総数	観光客	
平成28年度	470,233	295,306	174,927	159,506	47,136	423,097
29	491,457	308,635	182,822	153,336	61,491	429,966
30	512,898	322,100	190,798	142,375	68,405	444,493
令和元年度	500,729	314,458	186,271	146,774	78,164	422,565
2	202,095	126,916	75,179	103,556	51,729	150,366

資料…市観光連携室

出典：紋別市（2021）『令和3年紋別市統計書』115頁より抜粋。

表 2 観光施設利用状況

年度	コムケ国際 キャンプ場	オムサロ 原生花園	大山山頂園
平成28年度	731	38,354	11,096
29	970	41,004	12,440
30	919	35,911	9,445
令和元年度	1,144	31,191	12,439
2	1,429	26,003	8,109

資料…市観光連携室、市農政林務課

※大山山頂園には、スカイタワー、公園、コテージの利用者を含む

出典：紋別市（2021）『令和3年紋別市統計書』115頁より抜粋。

約 8,000 となっている。

(9) 行楽・観光目的の訪問の多さ

紋別市を訪問する人々の中で、行楽・観光を目的とする人々は全体でどのくらいいるのだろうか。株式会社ブランド総合研究所「地域ブ

ランド調査 2024」における紋別市の「訪問経験（行楽・観光のため）」は 4.4%（7.8%）であり、これは 2024 年の道平均 6.5%（7.4%）、全国平均 7.2%（7.5%）を下回る結果となった（括弧内は前年の数値）。行楽・観光のために紋別市を訪れた人の割合は、近年では 2021 年が

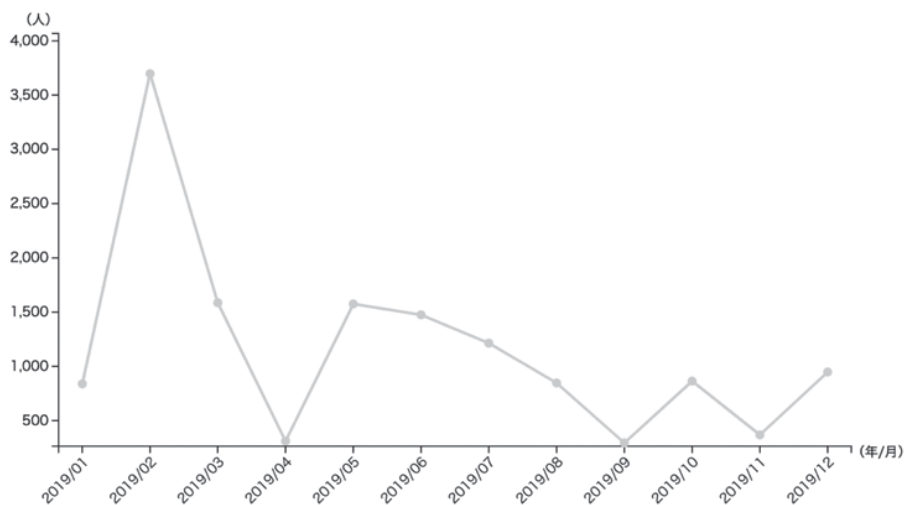
35) 株式会社ブランド総合研究所「地域ブランド調査 2024（紋別市）」5 頁、また 2023 年調査も合わせて参照。

5.2%、2022 年が 6.0%、そして 2023 年は 7.8%
と少しずつ伸びる傾向にあった³⁶⁾。

新型コロナウイルス感染症流行以前の 2019
年の訪日外国人旅行者の訪問者数(昼間(10-18
時)の滞在者数)の月平均は 1,168 人であっ
た³⁶⁾。図 7 に月別の訪問数の推移を示した。2

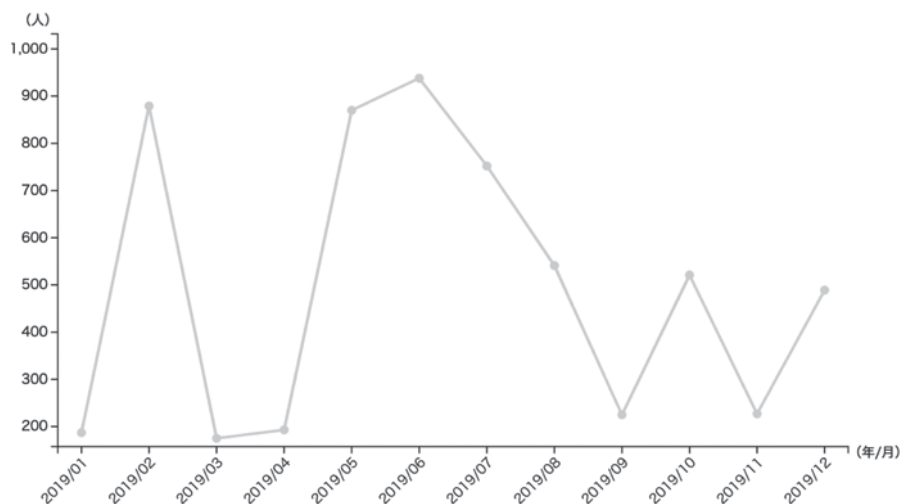
(10) 訪日外国旅行者数(2019年)

図 7 訪日外国人旅行者訪問数の推移(2019)



出典：RESAS 観光マップ「外国人滞在分析 地域別滞在者数の推移 昼間(10-18時)」
(紋別市2019年)を参照。

図 8 訪日外国人旅行者宿泊数の推移(2019)



出典：RESAS 観光マップ「外国人滞在分析 地域別滞在者数の推移 夜間(2-5時)」
(紋別市2019年)を参照。

36) RESAS 観光マップ「外国人滞在分析 地域別滞在者数の推移 昼間(10-18時)」紋別市を参照。

～3月と5～7月の年2回の訪問者のピークが認められる。

(11) 訪日外国人旅行者宿泊数

2019年の訪日外国人旅行者の宿泊者数（夜間（2-5時）の滞在者数）の月平均は500人であった³⁷⁾。図8は2019年の月別の宿泊滞在数の推移である。訪問数と同様、2～3月と5月～7月に宿泊者のピークがある。

(12) 国際会議開催件数

北方圏国際シンポジウムが1986年以降開催されている。北方圏国際シンポジウムは、「昭和40年紋別市に設置された北海道大学低温化学研究所附属流水研究施設の開設20周年および故田畑忠司教授の追悼式をかねて」を趣旨として、1986年に第1回シンポジウムが開催されたようである³⁸⁾。開催回数は2023年で37回を数え、2024年2月には第38回目のシンポジウムが予定されている³⁹⁾。

(13) 観光客誘致活動

紋別市の総合戦略（第2期：2020年度から2024年度まで）では、「もんべつの恵まれた豊かな資源を活かし、稼ぐ力を高め、人が集まるまちをつくる」という基本目標が掲げられているが⁴⁰⁾、その中の施策2「国内・国外観光客の誘客」では、観光と食による相乗効果を図ることで「世界に発信する流水観光拠点」の確立を目指している。同市は東アジア（台湾や香港）や東南アジア（シンガポール、マレーシア、タイ）などをターゲットに誘致活動を行っているようである⁴¹⁾。2018（平成30）年の外国人観光客宿泊客延数は8,162であったが、2024（令和6）年には10,000人を目指す⁴²⁾。

観光の目玉の一つが紋別港エリアである。現在、同地域では開発が進められているが、2016年には「みなとオアシス」に登録された。これは、地域住民の交流や観光の振興を通じた地域の活性化に資する「みなと」を核としたまちづくりを促進するため、住民参加による地域振興の取り組みが継続的に行われる施設として、国土交通省港湾局長が認めるものである⁴³⁾。

37) RESAS 観光マップ「外国人滞在分析 地域別滞在者数の推移 夜間（2－5時）」紋別市を参照。

38) 紋別市公式HP「北方圏国際シンポジウムの経緯」などを参照。

39) 北方圏国際シンポジウム実行委員会公式HP（<http://okhotsk-mombetsu.jp/okhsympo/top-index.html>）（最終アクセス2024年1月3日）を参照。

40) 基本目標は全部で5つある。本文で取り上げた目標2以外は次の通りである。「力強い産業を確立し、企業と働く人がともに輝けるまちをつくる」（基本目標1）、「若い世代の結婚・出産の希望を叶え、健やかな子どもの育ちを支えるまちをつくる」（基本目標3）、「健康でいきいきと活躍できる共生社会を確立し、安心して住み続けられるまちをつくる」（基本目標4）、「地域を支える人を育み、住民参画による協働のまちをつくる」（基本目標5）。紋別市（2020）『第2期 紋別市総合戦略』を参照。

41) 2023年11月16日に行なった市担当者（観光空港対策室）へのヒアリング内容とその際の参考資料などを参照。

42) 同上、25頁を参照。

43) 国土交通省北海道開発局「北海道のみなとオアシス」

（https://www.hkd.mlit.go.jp/ky/kk/kou_kei/ud49g7000000tn4q.html）（最終アクセス2023年8月17日）を参照。

「みなとオアシスもんべつ」は北海道に12ヶ所存在する「みなとオアシス」の1つであり、流水観光船「ガリンコ号Ⅲ IMERU（イメル）」発着のターミナルでもある「海洋交流館」を中心に、世界初となる氷海展望塔「オホーツクタワー」とその周辺に位置する第3防波堤「クリオネプロムナード」等の施設を活用した交流拠点づくりを推進している⁴⁴⁾。

なお、市の担当者によると、紋別市ではこれまで流水をメインとした観光誘致を行ってきたが、温暖化の影響などにより、近年では流水を見ることができる日が減少していると言う。そのため市では現在、ラベンダー畑やアザラシ飼育施設など、流水以外の観光資源のさらなる活用について検討を行っている⁴⁵⁾。

紋別観光案内所のウェブサイトは、12カ国語（インドネシア語、タイ語、ドイツ語、ネパール語、フランス語、ベトナム語、マレー語、ロシア語、英語、韓国語、中国語（簡体）、中国語（繁体））に対応しており、観光、食事、宿泊、お土産に関する情報に加え、モデルコースなども掲載されている。同サイトにはまた、ダウンロード可能な日本語のデジタルパンフレットもある⁴⁶⁾。

(14) 自治体SNSフォロワー数

2024年1月時点での紋別市のFacebook

のフォロワーは約2,700人で、YouTubeでは紋別市役所・移住情報チャンネルがあるが、その登録者は約500人であった。観光案内所のX（旧Twitter）のフォロワーは約900人で、Instagramが約2,000人ほど、Facebookについては約1万人フォロワーがいる。TwitterとInstagramはこの2、3年で始めた。発信言語は各SNSを見る限り、日本語がメインとなっている。

(15) 魅力度・認知度・観光意欲度

「地域ブランド調査2024（紋別市）」⁴⁷⁾によると、紋別市は魅力度・認知度・観光意欲度の合計は74.0点であった。魅力度は14.9点（14.8点）で全国では238位（250位）、認知度は28.9点（27.6点）で全国では333位（358位）、観光意欲度は30.2点（30.0点）で全国では145位（158位）であった（括弧内は前年の数値）。

(16) 日本人大学生の海外留学・海外派遣数

先述のとおり、紋別市には大学などの高等教育機関がないため、該当なし。

(17) 姉妹都市提携数と青少年海外派遣事業等

紋別市には3つの姉妹都市提携先がある。1つは、アメリカ合衆国オレゴン州ニューポート

44) 国土交通省北海道開発局「みなとオアシスもんべつ」

(https://www.hkd.mlit.go.jp/ky/kk/kou_kei/ud49g7000000ttay.html)（最終アクセス2023年8月17日）を参照。

45) 前掲、2023年11月16日に行った市担当者（観光空港対策室）へのヒアリングより。

46) 紋別観光案内所公式HP（<https://tic.mombetsu.net/>）（最終アクセス2023年8月17日）を参照。

47) 前掲「地域ブランド調査2024」における「魅力度」、「認知度」、「観光意欲度」の3つの点数を合算した値。

市であり、1966年に姉妹都市となった。ニューポート市は紋別市と同緯度の太平洋に面した港町である。提携を結んでからは、5年ごとの周年事業を行っており、相互の訪問団が行き来している。そのほか、手紙の交換や高校生の交換留学、子どもの作品交換、中学生の派遣（3年に1度）、ニューポート市青少年親善訪問団の受入などが行われている⁴⁸⁾。

2つ目は、アメリカ合衆国アラスカ州フェアバンクスノーススターバロー郡である。紋別市内に開設されていた北海道大学低温科学研究所附属流水研究施設の開設20周年を記念して、1986（昭和61）年から北方圏国際シンポジウム「オホーツク海と流水」を開催されている。同シンポジウムが縁となりアラスカ大学の所在地であるフェアバンクスノーススターバローと1991（平成3）年に姉妹都市となった。それ以降は、学術交流をはじめ市民交流、文化交流が行われている⁴⁹⁾。

最後に、ロシア連邦サハリン州コルサコフ市である。サハリン州3番目の都市コルサコフ市（旧大泊）は、アニワ湾に面する港湾都市で、遠洋漁業の基地など水産業と交易の拠点である。紋別との距離も近く、同じ水産業を主体とする

街で、経済交流、ヨット交流、文化交流など市民交流が継続的に行われてきた⁵⁰⁾。しかし、ロシアのウクライナ侵攻の影響を受け、現在については休止せざるを得ない状況が続いている⁵¹⁾。

(18) 高等学校による海外派遣事業を通じた派遣数

既述のとおり（本稿I.3.（1））、紋別のロータリークラブとアメリカのロータリークラブ間でロータリー青少年交換事業を行っており、紋別とアメリカから毎年それぞれ1名ずつの高校生が交換留学を行なっている。

(19) その他の枠組みによる青少年の海外派遣数

青少年海外派遣事業という点では、姉妹都市提携先との交流が行われているが、近年ではタイとの青少年育成事業も実施している。紋別市は2019年、市内の青少年たちの文化体験や交流を促すこと、さらには国際感覚の醸成を図ることを目的として、タイのウドムスックサー学校、ピーコンハウス・ヤームサアート学校、バーンパコック・ウィターヤーコム学校の3校と連携協定を締結し、タイの生徒たちを受け入れる

48) 紋別市公式HP「姉妹都市の紹介」(<https://mombetsu.jp/administration/?content=130>)を参照（最終閲覧2023年11月1日）した他、2023年11月16日に行なった市国際交流推進室担当者へのヒアリング内容とその際の参考資料などを参照。

49) 同上、紋別市公式HPを参照。なお近年においては交流状況が限定的になっているため、活発な交流の復活に努めているようである。前掲、2023年11月16日に行なった市国際交流推進室担当者へのヒアリング内容より。

50) 同上、紋別市公式HP及び市担当者へのヒアリングより。

51) 同上、市国際交流推進室担当者へのヒアリング及び『紋別市国際交流委員会広報誌「きずな」』（2023年3月発行）における小林正男（紋別市国際交流委員会会長）の挨拶文などを参照。

52) DOTSU-NET 日刊教育版（2021年1月6日付）「紋別高 タイの学校と遠隔交流 友好を確かめ合う オリジナルTシャツ披露」を参照（<https://education.dotsu.co.jp/articles/detail/73196>）（最終閲覧2023年12月25日）。

青少年短期留学を行なっている⁵²⁾。

実際 2023 年 10 月には、十数名の学生たちが紋別市を訪問し、中学校／高校体験・交流（渚滑中学校、潮見中学校、紋別中学校、紋別高校）、和太鼓体験、剣道体験、日本語教室体験などを行なった⁵³⁾。紋別を実際に訪問するだけでなく、コロナ禍で行われていたオンライン交流も継続中のようなのである。なお、市は現在、タイからの受入だけでなく、日本からタイへの派遣も行っているが、2023 年 1 月には短期留学派遣という形でこれを実施した⁵⁴⁾。

5. 生活・居住

(1) 外国人住民と紋別市

本稿 I.2. (11) で記したように、紋別市の在留外国人数は 2024 年 6 月現在で 811 人(676 人)であり、年々増えつつあるのが現状である⁵⁵⁾。市の総合戦略などを参照すると、市内在住の外国人たちは紋別市の地域経済の維持とその活性化にとって欠かせない存在となっていることが伺える。例えば、市の基本目標①「力強い産業を確立し、企業と働く人がともに輝けるまちをつくる」では、技能実習生の受け入れや市内企業とのマッチング施策などを行うことで、外国人就労の拡大に取り組んでいることがわかる。

「外国人雇用者数（技能実習生含む）」については、2018（平成 30）年の 343 人を基準とし、2024（令和 6）年には 689 人を目標値に据えている⁵⁶⁾。この点、2024 年 6 月の在留資格別の内訳人数から推計するとその数は 700 人以上を超えているものと推測できる。

同目標①の施策 3 は「外国人就労の拡大」である。市では、海外人材雇用推進員と国際化推進員を雇用し⁵⁷⁾、特定技能などの外国人材の雇用を希望する企業とのマッチングや外国人留学生等へのリクルートに取り組むとともに、企業や関係団体との連携調整を行なっている。また宿泊業や飲食業等の多様な業種で外国人就労を拡大するため、相談窓口の設置や企業ニーズに応じた人材確保を図る（以上の事業についての詳細については次節（2）を参照）。さらに介護福祉施設等での就労を推進するために「外国人介護福祉人材育成支援協議会」へ加盟し、外国人留学生への奨学金制度を実施している。

数値目標としては、水産及び農林分野における外国人技能実習生登録者数を 2018 年の 247 人、61 人から、2024 年には 460 人、70 人を目指す。また 2018 年では 0 人であった特定技能雇用者数、外国人技能実習生登録者数（介護及び水産・農林・介護以外のその他）、在留

53) 関係する記事として NHK NEWS WEB「タイからの短期留学生 紋別市の高校で茶道を体験」(<https://www3.nhk.or.jp/sapporo-news/20231025/7000061959.html>) を参照（最終閲覧 2023 年 11 月 1 日）。

54) 前掲、2023 年 11 月 16 日、市国際交流推進室担当者へのヒアリングのほか、ヒアリング時に頂いた各種事業内容書類などを参照。

55) 前掲、法務省「在留外国人統計」を参照。

56) 紋別市（2020）『第 2 期 紋別市総合戦略（改訂版）』19 頁参照。

57) 2023 年 11 月現在では海外人材雇用推進員 1 名と国際化推進員 4 名がいる。海外人材雇用推進員は日本国籍で、国際化推進員の国籍については中国、タイ、ベトナム、ドイツである。

資格「介護」の外国人雇用者数を、2024年にはそれぞれ69人、10人、27人、13人とすることを目標としている⁵⁸⁾。

なお、以上のような取り組みを実施しているものの、今後の技能実習制度のあり方次第で、外国人材の確保がより厳しくなるのではいか、という見方もある⁵⁹⁾。技能実習生を必要とする現場からは、ただでさえ円安が進む中であって、日本語能力に関する新たな要件が加わるとすれば、日本に来るハードルがさらに高まるのではないかという不安もあるようだ。そうした状況を踏まえながら、ある監理団体関係者は「(紋別に)来てくれるような体制をいかに作るかが重要である」と指摘している。

(2) 外国人住民の受入れ体制

外国人の受入れ体制という点では、市は総合戦略の基本目標④「健康でいきいきと活躍できる共生社会を確立し、安心して住み続けられるまちをつくる」の中で施策4「外国人が安心して暮らせる社会の確立」を掲げ、その実現に向けて取り組んでいる。

この取り組みの中心となる部局が紋別市国際交流推進室である。2024年9月現在は12名(室長1名、参事2名、副参事1名、係員2名のほか、会計年度任用職員が6名でその内訳は国際化推進員4名、海外人材雇用推進員1名、事務員1名)の体制下で「国際交流」と「生

活・就労支援」を行っている。推進室の事務室は2021年に開設された「もんべつ国際交流ステーションすまいる」内に所在する⁶⁰⁾。ステーションの役割は「紋別市の国際交流拠点、外国人との共生社会の実現をテーマに、活発な交流事業などを展開することで、外国人と暮らす社会の意識醸成や行動に繋がる取組」⁶¹⁾を行うことである。

推進室が担当する「国際交流」業務には国際交流推進事業と海外青少年交流事業があり、「生活・就労支援」業務には外国人受入環境整備事業、外国人交通費等助成事業、国際交流ステーション運営事業、外国人就労推進事業、外国人留学生インターンシップ受入支援事業、日本語学校設立準備事業などがある。ここでは後者(生活・就労支援業務)の内容についてより詳しく記したい(国際交流業務については本稿c.研究・開発(1)及びd.文化・交流(17)～(19)を参照)。

まず外国人受入環境整備事業であるが、これは主に一元的相談窓口(ワンストップ型の相談窓口)を設置し、国際化推進員を配置して行っている。中心的な業務は通訳と相談対応であるが、その内容としては「入管手続」「雇用・労働」「医療」「出産・子育て」「住宅」「交通・運転免許」「通訳・翻訳等」と多岐にわたる。外国人交通費等助成事業では、在留資格のうち技能実習か特定技能、あるいは特定活動を

58) 同上、21頁参照。

59) 2023年11月16日に行なった監理団体関係者へのヒアリングより。

60) ステーション開設以前の国際交流サロンの取り組みについては、中園桐代(2020)「地域の『担い手』として外国人技能実習生を受け入れる人口減少自治体の試みー紋別市国際交流サロンを事例にー」『商工金融』第70巻第2号、43-63頁を参照されたい。

61) 前掲、2023年11月16日、市国際交流推進室担当者へのヒアリング時に頂いた事業内容書類を参照。

持つ外国人に対して、1 乗車 100 円でバス利用が可能となる外国人材バス乗車証を発行している。技能実習生らの移動手段が限られている中では、買い物においても、実習生同士の交流という点でも不便であり、コミュニティの形成が進みにくい状況であった。同事業は、この問題を解決する一方策として 2019 年から始まった。

国際交流ステーション運営事業には、日本語講座（オンライン講座含む）や着付け、書道、日本食などの日本文化体験講座、防犯講座や AED 講習、市内産業施設見学などがある。また、夏と冬に運動会やもちつきをするといった交流会も開催している。市の総合戦略でイベントへの参加状況を確認すると、2018 年時の外国人交流イベント参加人数は 572 名であり、日本語教室への参加人数は 133 名であったが、2024 年にはそれぞれ 1190 名、226 名と目標を設定している⁶²⁾。運営事業としてはさらに、技能実習 2 号修了までの 3 年間で良好に終えた実習生を対象として感謝状の贈呈を行なっている。ここには、市の産業基盤を支えてくれたことに対する敬意を表するだけでなく、紋別市の魅力を実習生の母国へと発信していくという狙いもあるようだ。

日本語講座においては、2024 年度より日常会話コースで外国人技能実習生等を対象に、市民を交えたワークショップを取り入れた講座を実施している。初回となった 7 月から 9 月ま

での講座では、高校生やステーション関係者のボランティアなどが参加する交流の機会となった⁶³⁾。

なお、ステーションで実際に働く国際化推進員に話を聞くと、交流イベントは数ある事業の中でも特に楽しく、その企画・運営に大きなやりがいを感じているようであった。そうしたイベントは、職場と住居を行き来するばかりの生活になりがちな外国人（特に技能実習生ら）にとって、街や地域のことを知る貴重な機会となっているようだった。一方、イベントには日本人参加者が少ないといった課題もある。国際化推進員の一人は、紋別市民と外国人住民との距離をいかに近づけるかが大切だ、と指摘する⁶⁴⁾。

推進室では外国人就労推進事業も実施している。その具体的内容には、雇用受入支援、定着支援のほか、各機関等での調整や職業体験支援、雇用推進等が含まれている。外国人留学生インターンシップの受入支援事業は 2021 年より始まった。2021 年には 4 社で 10 名が、2022 年には 5 社で 11 名が参加し、それぞれ 2 名の採用につながっている。事業担当者によれば、この事業はインターンの受入から就職までの様々なプロセスを企業と留学生に寄り添う‘伴走’型支援のようなものであり、受入企業側からも高く評価されているようだ。

最後に推進室では、紋別市における産業活動が多く外国人材によって支えられているとの

62) 前掲、紋別市（2020）『第 2 期 紋別市総合戦略（改訂版）』31 頁を参照。

63) 前掲、2024 年 9 月 18 日、市国際交流推進室担当者へのヒアリングとその時に頂いた参考資料を参照。

64) 2023 年 11 月 15 日に行った紋別市国際化推進員へのヒアリングより。

認識から、日本語学校の設置について必要な事項を検討するため市民検討会を組織し、国の動

向を見極めながら紋別に相応しい支援のあり方について検討をしている。

写真5 もんべつ国際交流ステーションすまいる



出典：もんべつ国際交流ステーションすまいる公式FB

(3) 外国人の住民投票権

紋別市には常設型（実施必至型）住民投票条例はなく、個別課題の住民投票条例を求める動きも今のところない。したがって、外国人の住民投票権については議論されていない（2023年10月現在）。

(4) 小売事業所密度

人々の暮らしやすさを示す指標には様々なものが考えられるが、そのうちの一つに小売事業所の密度が挙げられる。小売事業所とは、主に個人や家庭用消費者、あるいは製造業者らなどのために、商品を少量、少額にて販売する事業

所である。ここにはガソリンスタンドや菓子店、パン屋、弁当屋、豆腐屋、調剤薬局なども含まれる⁶⁵⁾。

紋別市においては以上のような小売事業所が全体で247箇所あり、その内訳は各種商品小売業が1箇所、織物・衣服・身の回り品小売業が11箇所、飲食料品小売業が64箇所、機械器具小売業が49箇所、その他の小売業が106箇所、無店舗小売業が16箇所であった⁶⁶⁾。

小売事業所総数を2014年の紋別市人口（23,109）で除した人口1万人当たりの事業所数は106.8である。

65) 経済産業省関連 HPなどを参照。

66) 平成26年経済センサス基礎調査結果（紋別市）を参照。

(5) 飲食店舗密度

紋別市の飲食店舗数を見ると、飲食店は173店舗あり、持ち帰り・配達飲食サービス業の事業所は10店舗であった⁶⁷⁾。人口1万人当たりの飲食店舗数は74.8である。

(6) コンビニ密度

紋別市のコンビニエンスストアの店舗数は、「iタウンページ」にて「コンビニエンスストア 紋別市」と検索すると16店舗あることがわかった。人口1万人当たりのコンビニエンスストア店舗数は7.8である。

6. 交通・アクセス

(1) 公共交通の利便性

市内バス路線については、北紋バス株式会社において、市内循環線 KURURI (南循環線・北循環線) を運行しており、また、少人数の需要に効率的な運行方法として、一部区間を予約制にしている上藻別 (かみもんべつ) デマンド線も運行している。一方、郊外線である遠軽線・紋別線については、北紋バス株式会社 (遠軽線) と北海道北見バス株式会社 (紋別線) で運行している。なお、地域における交通空白を解消するため、

上渚滑町立牛 (たつうし) ではスクールバス混乗運行を地域協議会運営のもと行っている。

紋別市では、以上のような市内及び郊外路線バスに加え、都市間高速バスといった路線が紋別バスターミナルと接続することにより、一体化した交通網が構築されている。

(2) 空港アクセス時間の短さ

毎日2便 (羽田空港→オホーツク紋別空港、オホーツク紋別空港→羽田空港) が運行している。所要時間は約1時間50分であり、空港連絡バスから市内バスターミナルまでは17分である⁶⁸⁾。

(3) 新幹線の利用しやすさ

現在のところ紋別市への新幹線整備に関する情報等は特になし。

(4) インターチェンジ数

紋別市にはない。

(5) 通勤時間の短さ

紋別市の「家計を主に支える者の通勤時間の中央値」は9.8分である⁶⁹⁾。

II. グローカル・デザインの具体的展開とその振り返り

筆者らは二度の紋別市訪問 (2023年11月、2024年9月) と文献調査を通して、紋別市では様々なグローバル・デザイン事業が展開され

ていることを知った。そこで本節では、その中でも紋別市による二つの交流事業と市内中心部に位置する紋別プリンスホテルの試みを取り上

67) 平成26年経済センサス基礎調査結果 (紋別市) を参照。

68) 紋別市公式HP「飛行機・空港連絡バス」(<https://mombetsu.jp/tourism/?content=1766>) (最終アクセス2023年8月17日) 参照。

69) 総務省「平成30年住宅・土地統計調査」における「家計を主に支える者の通勤時間の中央値」の紋別市のデータ参照。

げ、その中身や成果などについて考察することとする。そしてそれら事業のさらなる充実に向けたヒントや課題を抽出したい。なお、以下の記述の中にある発言内容等については2025年9月18日に筆者らが行った紋別市国際交流推進室担当者へのヒアリングと林孝浩（紋別プリンスホテル株式会社代表取締役）へのヒアリング内容によることをここに記しておきたい⁷⁰⁾。

1. 紋別市における二つの交流事業から
〈交流事業の概要〉

紋別市国際交流推進室では年間を通して様々な交流事業を行っているが⁷¹⁾、本節で取り上げるのは2024年2月に行われた「冬の魅力を知る 流水探検！」（以後、冬の魅力事業）と2024年5月に行われた「夏の交流会」である。それぞれの概要は表3のとおりである。

表3 本節で取り上げる交流事業の概要

事業名	冬の魅力を知る 流水探検！	夏の交流会
日時	2024年2月5日（月）8:45～11:30 2024年2月6日（火）8:45～11:30 2024年2月7日（水）8:45～11:30	2024年5月26日（日）10:00～14:30
目的	「流水の街」紋別ならではの交流事業や講演会等を実施し、冬の魅力を伝えながら外国人材の就労意欲とQOL（生活の質）の向上を図る	技能実習生などを対象にした交流事業であり、外国人同士や紋別市民との交流機会の拡大を図る
実施内容	・ガリンコ号IIIイメル乗船体験（船内にて交流イベント実施） ・北海道立オホーツク流水科学センター見学（ドームシアター鑑賞や講演聴講等）	・レクリエーション（8競技） ・アトラクション（紋別流水太鼓保存会による太鼓演奏） ・昼食
参加者	計244名（2月5日87名、6日82名、7日75名）。技能実習生らが9割近くを占める。	技能実習生等151名、委員・職員13名、ボランティア（日本人）14名。

出典：2024年9月18日に行ったヒアリング内容とその際に頂いた資料を参照し、筆者作成。

冬の魅力事業は3日間にわたって実施され、各回で80名前後が参加し、参加者の総計は244名となった。目的は、砕氷船への乗船体験や流水科学センターへの見学を実施し、冬の

魅力を伝えながら外国人材の就労意欲とQOL（生活の質）の向上を図ることである。参加者の9割近くは技能実習生であった⁷²⁾。「夏の交流会」は5月26日に実施され、技能実習生ら

70) それぞれのヒアリングについては次のとおりである。2024年9月18日10時から12時（話し手：紋別市国際交流推進室担当者、聞き手：西館崇・福岡浩彦）、2024年9月18日15時から16時半（話し手：林孝浩（紋別プリンスホテル株式会社代表取締役）、聞き手：西館崇・福岡浩彦。また紋別市観光空港対策室担当者が同席）。

71) 2024年度の事業としては、(1) 夏の交流会、(2) 冬の交流会、(3) 小学生向け多文化学習、(4) 外国の食文化体験、(5) 市民との多文化交流会、などが挙げられる。2024年9月18日、市国際交流推進室担当者へのヒアリングとその時に頂いた参考資料を参照。

72) 参加者を国籍で見ると2月5日ではタイ（37名）、ベトナム（29名）など、6日ではインドネシア（60名）など、7日ではベトナム（41名）などが多かった。同上、2024年9月18日、ヒアリング時における参考資料を参照。

を含め 200 人弱が参加した。目的は参加者（紋別市で暮らす外国人と紋別市民ら）間での交流であった⁷³⁾。

〈アンケート結果から ①冬の魅力事業〉

それぞれの事業ではアンケート調査がなされている⁷⁴⁾。まず冬の魅力事業ではガリンコ号乗船、科学センター見学、流水についての講演のそれぞれで 9 割以上が「満足」と答えている。「やや満足」を加えるとその満足値はほぼ 100% に近い。冬に魅力を感じるようになったかどうかを問う設問でも、「感じるようになった」が 75% を超え、「やや感じるようになった」が 20% を超えるなど、冬に対するイメージが大きく変わったことが読み取れる。市の担当者によれば、紋別市で暮らす外国人の多くにとって冬の寒さは厳しく、冬はネガティブなイメージで捉えられがちだった。ゆえに、本事業により、参加者の多くが冬の魅力を感じられたのは大きな成果であったと言える。

同アンケートではまた事業内容以外のことについても聞いている。「日常生活で困っていること」については、複数回答可で「未回答」（日常生活では困っていない）と「交通」（バス路線や時刻が限られている）がそれぞれ同数 1 位で 57（29.4%）であった。一方、「交通」については市の取り組みとして、技能実習生らに対する 100 円バス（1.5 の（2）を参照）を実施しているが、ここには運行本数などの課題もありそうだ。次いで、言葉①（仕事におけるコ

ミュニケーション）が 45（23.2%）、言葉②（買い物や病院などの生活上のコミュニケーション）が 38（19.6%）、さらには買い物、収入などが上位に入っていた。

外国人が「安全・安心して暮らすために必要だと感じること」を尋ねる設問（各カテゴリー内にて自由記載）では「交通・施設」「職場・待遇」「人間関係」「娯楽」「その他」「自分ができること」のうち「人間関係」と「自分ができること」について書いている人が多かった。前者では「交流・信頼関係作り」、「外国人を歓迎する気持ち・外国人への気配り」、「助け合い」といった項目が挙げられている一方、後者では「規定を守ること」「周りの環境に慣れていくこと」「自分の世話を自分でできること」などが挙げられている。次に、「仕事のモチベーションを上げるために必要なこと」を問う設問では、「収入・貯金・借金の返済」が最も多く、「職場での人間関係・コミュニケーション」「家族」などが続いた。

〈アンケート結果から ②夏の交流会〉

続いて夏の交流会についてであるが、同事業に対しても参加者の多くが「満足」と答えており、その値はほぼ 100% に近い。交流会の時に「誰と交流ができましたか」という設問（複数回答可）では、同じ国籍の人との交流が最も多く「交流できた」「やや交流できた」が合わせて 105 件、国籍の異なった人との交流は「交流できた」「やや交流できた」が合わせて 102 件であった。日本人との交流では「交流できた」

73) 参加者の国籍はインドネシア（79 名）が最多で、日本（30 名）、中国（29 名）、ベトナム（20 名）、タイ（19 名）、フィリピン（1 名）などであった。同上、2024 年 9 月 18 日、ヒアリング時における参考資料を参照。

74) 前掲、2024 年 9 月 18 日のヒアリングの際に頂いた資料「令和 5 年度『冬の魅力を知る 流水探検』に関するアンケート 結果まとめ」と「令和 6 年度夏の交流会の事業報告について」を参照。

が34件、「やや交流できた」が52件であった。今後の交流に対する希望としては複数回答可で「別の国籍の人」と答えた人が最も多く97件となっている。また今後の交流事業内容については（複数回答可）、レクリエーション（67件）、日本文化体験（64件）、日本語の学習（46件）などが上位に上がっているが、「町内会活動」や「日本人との茶話会」など、日本人との交流を前提とした事業を望む声もあった。

最後に、市担当者とのヒアリング時における意見交換にて、「一般市民と外国人との交流については今後も取り組むべき課題があるが」、その一方で「外国人雇用者や企業関係者と外国人との関係においては、この数年、大きく変わってきているのではないか」との指摘があったことを記しておきたい。外国人を労働力としてのみ捉えるのではなく、紋別市で暮らす同じ仲間として捉える雇用者たちが増えてきたのではないか、ということであった。長く市政に携わってきた担当者からのこの指摘は注目に値する。

2. 紋別プリンスホテルでの取り組み事例から 〈ホテルの概要〉

紋別プリンスホテルは1989年2月、紋別市本町に新築オープンしたホテルである。創業当時の客室は70室であったが、その後の増築や温泉掘削工事などを経て、現在では天然温泉の露天風呂を完備する全147室のホテルとなった。また2023年には別館「アネックス」（全7室）が完成している。

同ホテルの特徴は天然温泉がある他、カニ料理に代表される新鮮な魚介系料理、さらには市内中心部に位置することから市内飲食店街へのアクセスが良いことなどが挙げられるが、本稿

の関心に寄せて言えば、それは外国人従業員との共生・共創関係の構築である。筆者たちが宿泊した2024年9月にも外国人が働いており、筆者らをフロントで迎えてくれたのは日本語を流暢に話す外国人スタッフであった。

〈外国人雇用のきっかけとその理由〉

同ホテルを運営する紋別プリンスホテル株式会社代表取締役の林孝浩によれば、外国人スタッフは常時数名ほどが働いているようだが、そのきっかけは2011年頃、ワーキングホリデーで紋別に訪れた台湾人だった。3ヶ月の予定が延長して6ヶ月働くこととなり、期間が終了しても働きたいということで在留資格「技術・人文知識・国際業務」（以後、技人国）を取得し、2年間務めたという。その後、ワーキングホリデーか技人国を持った外国人らが当ホテルで働くという流れができたようだ。

林はなぜ外国人スタッフの採用に踏み切ったのだろうか。そしてそれをなぜ続けるのだろうか。答えの一つは外国人観光客の受け入れについての見通しであった。林は、団体ツアーの客であれば通訳がついていると考えたが、将来的には団体ではなく、通訳を伴わない個人客が増えるだろうと予測した。

もう一つの理由は、従業員の「外国人慣れ」であった。林曰く、「外国人慣れをうちのスタッフにさせたかった。“外国人”というと、日本人で不慣れな人は逃げてしまったり、構えてしまう。だからこそ慣れが必要だと考えた。今では、言葉が話せない場合であっても、臆することなく、身振り手振りで話もしますし、逃げることはない。そして、そういう風土がホテルの中に出来てきている」とのことであった。林は最初の理

由よりも、むしろ外国人慣れの方が大きな理由だったと振り返る。

〈チーム・コーチングによる研修〉

紋別プリンスホテルでは、外国人への「慣れ」の先に、スタッフが一緒になってホテルの価値を高めていく様子がうかがえた。その具体的実践の一つがチーム制で1ヶ月に1時間取り組むチーム・コーチング研修である。筆者らがヒアリングを行った2024年9月にはホテル内で6つのグループがあり、それぞれがテーマを決めて1年間、自身の成長と会社の課題を検討する時間を設けているようだ。

林によると、昨年（2023年）度までは林自らがファシリテートを務めてきたが、2024年度からはその役も全て社員に任せるようにしたようだ。チームでは当然のことながら、外国人スタッフも日本人スタッフと一緒に取り組む。それぞれが対等な形で意見交換を行ったり、議論したりすることもある⁷⁵⁾。

〈外国人が「頼ることができる場所」づくり〉

林はまた外国人たちが「頼ることのできる場所」を確保することも大切だと語る。そして次のように指摘する。「私は外国人スタッフたちの“お父さん”になったつもりで接している。たとえば、紋別の冬は厳しく、行動範囲が大きく制限される。長靴が欲しいというので、車を出し、靴屋さんまで連れて行ってあげたこともある。（中略）今、紋別では日本語学校を作ろう

としているが、考え方は同じだ。日本語を学ぶ場所も重要だが、そこは“学ぶ”場所だけでなく、外国人が“頼ることのできる場所”となることも大切ではないか」。

先の紋別市の事業でも指摘したが、紋別で暮らす外国人たちにとっては冬の過ごし方が大きな課題となっていることがうかがえる。この点で林は自分自身を「お父さん」と捉え、外国人スタッフらを親身になって支えているが、同時に「ずっと『お父さん』でいることはできない」と言う。林は「自主性を重んじたい」と話し、たとえば日本の運転免許証を取得したスタッフには「次はあなたが先輩としてサポートしてほしい」と伝えているようだ。

〈インバウンド戦略〉

林は紋別市のインバウンド事業における先駆的存在であるという⁷⁶⁾。そこで筆者らはその試みについて具体的に聞くこととした。そのポイントは次のとおりであった。

ターゲットの絞り込み 海外からの観光客

については2000年代から特に力を入れて取り組むようになったが、注目したのは北海道を訪れる場合の宿泊数である。たとえば韓国からの観光客は距離が近いこともあり2泊3日がほとんどである。この場合、観光客の多くは札幌などの都会を訪ねる傾向にあり、道内の地方都市は選ばれがたい。他方、マレーシアなど東南アジアの国々から北海道に来る場合は5泊6日などで滞在することがわかった。そこで主にマ

75) 紋別プリンスホテルの様々な社内研修についてはまた、NBC コンサルタンツ株式会社（2023）「流水の街に滾る経営情熱」『NBC PLUS』VOL.108、NBC コンサルタンツ株式会社、を参照。

76) 紋別市関係者より。

レーシアやシンガポールなど、東南アジアの国を対象としたプロモーションを展開することにした。なおホテルではカニ料理を出す、冷たいカニは出さない。これは温かいカニ料理を好む東南アジアからの旅行者にも喜ばれている。

「紋別のもの」ではなく、「日本のもの」を提供すること ホテルに宿泊する外国人客たちを見ていると、ある時「彼らは紋別の食材ではなく、日本の食材を食べに来ているのだ」と気づいた。食材だけでなく、彼らはまた「紋別の何か」というより「日本」を体験しに来ていることにも気づいた。そこで宿泊客には日本を体験してもらうことを心がけるようにした。具体的には餅つきを行ったり、浴衣を着て写真を撮ったりするサービスを始めた。どちらも紋別の文化というより、日本の文化であるが、外国人客たちは喜んで参加しており、好況を博す企画となっている。

地域と共にあるインバウンド 地域の活性化についても取り組んでいきたい。例えば、ホテルだけで全て完結しないよう、希望する宿泊客にはホテル外で夕食を勧めている。宿泊客のうちの100人が「はまなす通り」で食事を取れば、市内飲食店の収益にもつながるし、地域全体の活性化につながると考えられる。

インバウンド事業を支える地域人材を育てる意味でも、地域活性化の方策としても、生まれ育った地域から一度、離れることの大切さを感じている。私たちに出来ることは、まずは「地元を離れることを（特に若者世代の日本人に対して）後押しする」ということではないか。離れることで地元の良さがわかるからである。これを踏まえ、紋別プリンスホテルには「アルムナイ制度」と呼ばれる離職者対象の制度がある。

「若者が田舎にずっといる」と考える方がおかしい。一度外に出て、また紋別に戻り、プリンスホテルで働きたいという場合は給料などの面で優遇することになっている。

3. 先進事例を踏まえて

紋別市の担当者と紋別プリンスホテル代表取締役である林へのヒアリングの中でまず印象的だったことは、いずれのヒアリングでも地域のあり方や日本人自身の考え方などについて議論が及んだことである。そこでは「日本人自身が変わっていくことの大切さ」や「自治会や町内会のあり方」についての意見交換がなされた。グローバルなつながりについて考える際、外国人と日本人との交流に関する課題が挙げられることは多い。しかしよくよく考えてみると、日本人同士であってもその地域で、あるいは町内会において、近隣住民や隣人のことを気にせず暮らしているのが現状である。自治会の仕組みも全国の地方都市では形骸化しているところが多いと推察できる。そのような状況を踏まえるのなら、外国人を地域でどのように受け入れるのかといった議論の前に、地域社会自体のあり方を考えいくことが必要ではないかと思われた。

第二に、市の担当者が外国人に対する事業アンケートにて、「外国人が安全・安心して暮らすために必要だと感じること」の設問内で「自分ができること」を問うたこと、そして実際に参加者たちから様々な回答があったことの意義は大きい。担当者によると、この設問の趣旨は技能実習生たちが「自分たち自身も出来ることを考えている」ということを、雇用者側など関係者へ伝えたかったと振り返るが、外国人材た

ちはまさに支援される側だけの立場ではないのである。この地域社会を共に作る仲間であり、かつそこで実際に生活を営む主体なのである。外国人自身による主体的な活動内容を引き出したこの設問の意図は高く評価できるのではないだろうか。

第三に、市による様々な交流事業の成功（参加者のほぼ100%が同事業に対して満足している）は評価できるが、この交流が入り口やきっかけとなり、外国人材と日本人たちが当たり前のようにサークル活動を行ったり、共に時間を過ごしたりする社会へと向かっていくことを期待したい。この点で、本稿で取り上げた交流事業が今後も継続することが望まれる。また2024年度からスタートした交流型の日本語講座（I.5.（2）を参照）は大きな可能性を持つのではないか。そこでは先生と生徒という関係だけでなく、同じ紋別で暮らす住民同士という対等な関係性にもとづく対話が生まれると思うからである。なお、ヒアリングの際には、紋別市民がかつて抱いていた外国人に対するイメージなどについても議論になったが、イメージの形成過程とその変遷についての研究は、この第三の点を検討する上で有意義なものとなろう。

最後に、林の考え方や実践には、外国人との

共生へ向けた手がかりが多く示唆されていたように思う。共生とは一般に、国籍や民族等の異なる背景をもつ人々が共に安心して暮らしながら、対等な関係のもとで地域社会を一緒につくることである。林は「お父さん」のように外国人スタッフに接すると話していたが、それは外国人と共に安心して豊かに暮らす社会の実現にとって欠かせない姿勢である。しかし林は第二のお父さん役を先輩外国人スタッフに求めるなど、彼らの責任意識を同時に育てようとしているように思われる。ホテル内での日本人スタッフと一緒にを行うチーム・コーチング研修はまた、外国人と日本人が対等な立場でホテル業の向上とその価値を高めていく試みであると言える。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、林孝浩様（紋別プリンスホテル株式会社代表取締役）、紋別市国際交流推進室の皆様におかれましては、ヒアリング調査を通して貴重な情報提供とご指摘を頂きました。ここに記してお礼を申し上げます。なお本稿の内容に誤り等があるとすれば、それらは全て筆者の責任です。

Glocal Design Proposal: Monbetsu City

Takashi Nishitate, Associate Professor
Kyoai Gakuen University

Hirohiko Fukushima, Professor
Institute of Social System,
Chuo Gakuin University

Abstract

This paper describes the current situation in Monbetsu City, Hokkaido, from the perspective of Glocal Design, focusing on six main areas: general information, economy and business, research and development, culture and exchange, living and residence, and transportation and access. The city is located in the center of the Okhotsk coast, 41 km from north to south and 34 km from east to west, and has a total area of 830.70 km². As of June 2024, 20,059 people live in the city, which has a magnificent natural environment and landscape surrounded by the sea, mountains, and rivers. One of the main industries of Monbetsu City is the fish processing industry, which has a total shipment value of 36.5 billion yen in fiscal 2021; however, it faces a severe labor shortage and needs to rely on foreign human resources such as technical interns. As of June 2024, the number of foreign residents in the city is 811, or 4.00% of the city's population. Of these, 503 are technical interns, accounting for more than half, followed by 212 with specific professional certifications. A key aspect of the glocal design of Monbetsu City, a plan that integrates global and local resources to build a cohesive community, is how its residents foster coexistence with foreign residents. Coexistence, or *Kyosei* in Japanese, refers to a society where everyone can live together in peace and security, and also enhance the value of the local community or create new values in collaboration with people from diverse backgrounds. This study examines two exchange meetings mainly for foreign residents of Monbetsu City by the city municipal government. It also highlights ongoing programs at the Monbetsu Prince Hotel, located in the city center. Furthermore, this paper discusses the implications and challenges of these initiatives in fostering a *Kyosei* society in Monbetsu.